

## 【わらに本言】

物のあわれを知るとはどういう事か

物のあわれを知るといふ事。まずすべて「あはれ」<sup>1</sup>というのは元来、見る物・聞く物・触れる事に心が感じて出る嘆息なげきの声であつて、今（江戸時代）の俗言でも「ああ」と言い「はれ」というのがこれである。例えば月・花を見て感動して「ああ、見事な花じゃ」「はれ、よい月かな」<sup>2</sup>などと言つが、「あはれ」といふのはこの「ああ」と「はれ」との重なつた物で、漢文に「嗚呼」などとある文字を「ああ」と読むのもこれである。古語で「あな」または「あや」などと言つ「あ」も同じ。また「はや」とも「はも」とも言つ「は」も、かの「はれの」「は」と同じ。また後世の言葉で「あつはれ（あっぱれ）」と言つのも「ああはれ」と感動する言葉であつて、同じことである。

さて後世では、「あはれ」の「は」の文字を音便によつて「わ」と言つが、古いにしへはすべてこの

1 あはれ——説明内容と合わせるため、「こ」からしばらくは括弧付きの旧仮名遣いで表記する。

2 ああ、見事な云々——原文は「ああ見ことな花ぢや」「はれよい月かな」。

よつな所も皆、本来の音のままに、「は」の文字は「葉」「齒」のように発音したのである。特にこの「あはれ」という言葉は嘆く声であつて、「ああ」と「はれ」とが重なつたものであるから当然である。『古語拾遺』(八〇七年成立)に「あはれ」を

イフコロハアメハレナリ  
言 天晴也

と言つてゐるのはとんでもない誤りであるが、この例からも、昔は「はれ」を「晴」のよう  
に発音した事が分かる。

さて古の歌に「あはれ」と詠んだものは、「ひとつ松あはれ」(『日本書紀』)、「あはれその鳥」(『万葉集』)、「あはれいくよの屋どなれや」(『古今集』)、「あはれむかしへ有りきてふ」(『古今集』)などの類いは、感動してすぐに「ああはれ」と嘆いたまゝを詠んだもので、この言葉の本義である。「あはれあはれとなげきあまり」(『古今集』)、「あはれあなつと過しつるかな」(『古今集』)などの類いも同じ。

あはれてふ言をあまたにやらじとや

春におくれてひとりさくらん

3 「葉」「齒」共に「は」(HY)を表す万葉仮名。漢字の音を用いて日本語の音を表記している。

「あはれ」という言葉を他の多くの花に分け与えまいと、春に遅れて一人咲いているのだらう」

という歌（『古今集』）も、「人が花を見て感動して言う『ああはれ』という言葉を、その花が内心で『他の多くの花には分け与えずに、自分一人がそう言われよう』と違って、他の花が皆散つた後に一人遅れて咲いているのだらう」と詠んだのである。これらによって、まず「あはれ」という言葉の本義を知りなさい。

さてまた「あはれと見る」「あはれときく」「あはれと思ふ」などと言う類いは、少々転じた言い方であつて、これは「ああはれ」と感じて、見、聞き、思つのである。また「あはれなり」という類いは、「ああはれ」と感じられる様子である。

また「あはれを知る」「あはれを見す」「あはれに堪へず」などという類いは、すべて何事であれ「ああはれ」と感じられる様子を名付けて「あはれ」という物にして言つたのであつて、必ず「ああはれ」と感じるべき事に当たつては、その感じるべき風情をわきまえ知つて感じるのを「あはれをしる」と言つのである。

また「物をあはれむ」という言葉も、元来は「ああはれ」と感じることである。『古今集』の序に「霞をあはれみ」とある事などをもつて理解しなさい。

また後世では「あはれ」と言うのに、「哀」の字を書いて、ただ悲哀の意味とだけ思うようだが、「あはれ」は悲哀とは限らず、嬉しさでも、面白さでも、楽しさでも、風情のあることでも、すべて「あはれ」と思われる事は皆「あはれ」である。だから「あはれにおかしく」とも「あはれにうれしく」とも連ねて言っている。それは滑稽さにも嬉しさにも、「あはれ」と感じた事を「あはれに」と言ったのである。

ただしまだ、「おかしき」「うれしき」などと「あはれ」とを対置して言った事も多いのは、人の情が様々に感じる事の中で、嬉しい事・面白い事などには感じる事が深くなく、ただ悲しい事・辛い事・恋しい事など、総じて心の思いがかなわない場合には、感じる事が格別に深いものであるために、このように深い方を特に「あはれ」と言ったのである。俗に悲哀だけを言うのもその意味合いである。例えば

「若菜」の巻に、

梅の花を、花のさかりにならばて見ばや、

(梅の花を、桜の花の盛りに並べて見たいものだ)

と言っている事があるのと似ている。梅の花も花であるが、それと対置して桜を特に「花」

と言っている。

さてまた「物に感じる」とは、俗には良い事だけに言つようだが、これもそうではない。字典にも「感は動也」と言つて、心が動く事であるから、良い事であれ悪い事であれ、心が動いて「ああはれ」と思われるのは皆感じる事であつて、「ああはれ」と言つ言葉によく当てはまる文字である。漢文に

感<sup>セシム</sup>鬼神<sup>ヲ</sup>

(鬼神を感動させる)

とあつて、『古今集』の真名序にもそのように書かれているが、仮名序には「おに神をもあはれと思はせ」と書かれているから、「ああはれ」は物に感じる事であることと分かる。大体「あはれ」という言葉の本義、また転じた用法などは上に述べた通りに心得なさい。

さてまた「物のあわれ」というのも同じ事であつて、「物」というのは、「言う」を「物言<sup>ものい</sup>う」、「語る」を「物語る<sup>ものがた</sup>」、また「物詣<sup>ものもつ</sup>で」、「物見<sup>ものみ</sup>」、「物忌<sup>ものい</sup>み」などと言つ類いのもので、広く言つ時に添える言葉である。